

講演

イエスは何を語ったのか？

—イエスの思想の現代的意義—

八木 誠一

八木 「イエスは何を語ったのか？」という題をいただいたのですが、もちろん研究の資料は新約聖書になります。ところで『新約聖書』に書いてあること、特にはじめの共観福音書（それぞれ、マタイ、マルコ、ルカによる三福音書）は、イエスの言行録のようになつていますけれども、そこに書いてある通りが、歴史的な事実とは考えられませんので、新約聖書学という専門の分野が、どこまでが歴史で、どこまでが教団の創作と言つては悪いんですけれど、附加やコメントであるかという研究をやつて、それには長い歴史があるんです。それを前提としてお話をさせていただきます。

共観福音書は、歴史的な事実と言いますか、イエスが実際に語った言葉を多く含んでいると思われますけれど、かなりの部分がいわば真偽が曖昧な領域にあるのです。ですから、なるべくイエスの語つた言葉であるということが、確かな部分を資料にしてお話したいと思います。それがひとつです。

もうひとつは、私は今までイエスについていろんなかたちで話をして参りましたけれども、今日はちょっと変わった角度から話してみたくなりました。そのような語り方はまだあまり自分で馴染んでおりませんので、お聞き苦しい点があるかと思いますが、討議の時間がありますので、ご忌憚のないご意見を賜りたいと思います。

レジメをお配りいたしましたけれども、1の部分ですね、「我々の日常生活」、括弧として「イエスの人間把握との比較のために」というふうに書いてあります。2が「イエスの言葉」です。イエスの言葉を際立たせるために、私たちの日常生活がどういうものであるか、倫理や道徳というものを含めてそれを描きだす。そうすると、それに対してイエスの言葉がどういう態度を取っているかが、明らかになると思います。そういうひとつの方法を取ってみたいと思います。

いずれにしても、イエスの言葉だけではありません。新約聖書全体がそうですし、広く言えば哲学や倫理ということがそうですけれども、人格というような言葉ですね、人格、あるいは共同体ということが出て参りますので、そういうところから、まず話を始めさせていただきたいと思います。

◆人格と共同体

人格という言葉ですね、これは元来の日本語ではなく、訳語で、英語では *person*、ドイツ語だと *Person* (ペルソーン)、フランス語で *personne* (ペルソヌヌ) ですが、その基になるものは、ラテン語の *persona* (ペルソーナ) で、*persona* とは本来どういう意味かと言いますと、古代ギリシャ・ローマ時代、演劇のときに役者が着けた仮面のことなんです。ご承知の方が多いと思います。

日本でもお能では、お面を着けることがあります。一般の演劇ではあまり仮面を着けているのを見ません。小学校の学芸会では見ますけれど。ギリシャ、ローマの古代では必ず仮面を着けて、それが *persona* と言われていたんです。

ギリシャ語では *proson* (プロソノン) ですが、この場合は顔という意味の方が先で、仮面という意味は派生的です。そのあとでペルソーナという言葉が、舞台を降りまして、一般の社会で使われるようになってくる。そうするとどういう意味になるか。

何しろ仮面ですから、役割を示すわけです。それから個性を示すというように変わっていきます。

つまり演劇では言葉のやりとりがあるわけです。お面を着けた役者は言葉のやりとりの中で、自分の役割を演ずるといって、そういう意味を持つてくるわけです。

ですから、この言葉が舞台を降りますと、たとえば法律用語として使われて、権利と義務の帰属点ということなのですが、人間は言葉のやりとり(人間関係)の中で自分の仕事をしていく、そういう人間には法的には権利と義務が帰属していますから、そういう意味になったのだらうと思われまます。

それ以後、この言葉は一般化したしまして、いろいろな意味に使われてくるわけです。そこで浮かび上がってくるのは、「言葉のやりとりの中で」というよりも、むしろ「自分の義務を果たす、責任主体」という方向です。

特にカントの場合は人格というものは、定言命法——無条件的な道德律ですが——の下に置かれている存在です。人格は定言命法をそれぞれの状況の中で活かす、そういう存在であるわけですが、そういうふうには道德的命法の下に置かれていることを人格性というふうに言ったりしています。

しかし、英語で *person* といっても、意味が非常に広いのです。喫茶店なんかに行ったら、日本だったら「二人」と言うところを「two persons」と言っていますから、使い方は非常に広いです。

それからラテン語では、*persona* もそうですが、ローマという国が非常に法的な思考に長けておりまして、何しろ地中海沿岸からイギリスにまで及ぶ大帝国を作って、それを治めていた国ですから、都市生活や共同体生活に関する言葉が非常に発達しておりまして、示唆的な言葉が多いんです。

そのひとつが *communio* (コムニオ) として、共同体ですね。英語の *common* の語源になっているんです。しかし *common* の語源「共通している」という意味ですが、*communio* とはむしろシェア (*share*) することという意味です。

シェアするとは、ひとつのものを皆でシェアするという意味もありますが、何かを持っている人と、持っていない人がいる場合、それらを皆で分かち合って、その結果、皆で同じものを持つように

なるという意味もあるわけです。

この言葉の元来の構成は, *co* (ユ) は「一緒に」という意味です。 *munio* (ムーニオ) の中には *munus* (ムーヌス) という言葉、これが非常に面白いので、少し説明します。

ムーヌスには「義務」と「贈り物」という、一見反対した意味があるんです。義務と贈り物は、ずいぶん違うんですけども、それが同じ言葉なのです。

その解釈はいろいろと可能ですが、ラテン語の *communio* という言葉では両方がどのように関係しているかは置いて、これをヒントにして考えてみると、それぞれの人が、それぞれの持ち場で働いて(義務)、そこで作ったものをお互いに分け合う。分け合うものが「贈り物」になるわけです。そういう姿が浮かび上がってきます。

いずれにせよ *communio* (コムニロー) という動詞があります。 *communio* はシェアするとう意味なのですが、その名詞のかたちが *communicatio* (コムニカチオ) で、これが現在の *communication* という言葉になって広がっています。 *communication* という、主に意志の疎通、言葉のレベルでのコミュニケーションのことになるのですが、元来を考えてみますと、もともとずっと広い意味であって、それぞれに働いて作ったものを、お互いに分け合う、与え合う。そうすることで、共同体を形成して維持していくことを、 *communicatio* と言っている。

だから *communication* という語には、結局、必要なものを作ってシェアすることによる共同体の形成と維持という意味が根本にある。現在では専らそこから言葉によるコミュニケーション(意志の伝達、相互理解、合意の形成)というふうに使われています。

しかし元の意味に戻って考えますと、 *persona* (ペリ人格) というものは、言葉の *communication* の中で、自分の仕事を遂行していく責任主体ということですから、これは *communio* あるいは *communicatio* とびったり合った言葉なのです。ですから *communicatio* という語には、そういう人

たちがお互いに作ったものを分かち合って、ひとつの共同体が形成されるという意味があるわけです。

そういう意味で人格と共同体という語は、密接に関連し合ったものであります。

日本語だと解りませんが、ラテン語の場合はそれがはっきりしてきます。それをひとつの手掛かりとして使うと、人格というものが、コミュニケーションの中で成り立っている。そのネットワークの中で自分の仕事を遂行していく。そういう責任主体で、そういう人たちがお互いに集って、それぞれの人が働いて、自分の作ったものを互いに与え合ったり、必要としているものを与え合う、分かち合うということで、共同体が作られて維持されていく。こういう姿が浮かび上がってきます。

ですから、 *communication* は広い意味で共同体形成行為だと考えていいと思います。そうすると人格とは、その中で共同体形成に実際に関わっている人のことで、それを私は *communicant* (コムニカント、「コミュニケーションする者」の意) と言っています。

これを人間の共同生活のひとつの基本的なモデルとして考えていいのではなからうか。もっと詳しくお話ししなければいけないのですが、端折らせていただきますが、簡単に申しますと、人間が生きていく上での基本的なモデルは、元来はお互いに、それぞれが仕事をして何かを作る。お互いにそれを必要とするところに分かち合う。それが言葉のやりとり(狭義のコミュニケーション)の中でなされてゆく。それが共同体を形成する所以であり、また維持する所以であるということです。

こういうふうには人格と共同体が関係し合っていく。これをひとつの基本的なモデルとして考える。

◆共同体形成と維持のための規範

しかしそれでは、あまりにも抽象的すぎますので、もう少しこれを具体化していった方がいいと思

うのですが、しかし今の段階で共同体ということを考えてみましても、そこには以上のような意味での *communio*、つまり「一緒に生きる」とか、労働と交換とか、それから言語による狭い意味でのコミュニケーションですね、そういう意味が含まれてきます。

このような共同体を形成し維持していくための規範を見ますと、それらは私たちが了解している倫理と一致してくるわけです。もっともそれについては、もう少し詳しく話さなければならぬことが、いくつもあります。

たとえば、今言ったような共同体であれば、そこでは分かち合う、与え合うことがあるんですけども、実際に私たちの生活では、そうなっておりません。つまり「与える」というと、お返しなしで与えるのですが、制度化されればどうしても「交換」になります。与える一方では長くは持ちませんから制度化されれば交換になります。

「交換」というのは、原則として等価交換ですから、その等価性ということがはっきりしてきて、数量化されると貨幣経済が成り立つわけです。

貨幣経済が成立しますと、当然のことですが、所有権というものが確立しないと貨幣経済はできません。所有権、あるいは契約、あるいは権利、義務ですね、あるいは契約違反に対する罰ということが成り立ってきて、そういうものを秩序づけるシステムができますと、それはすでに国家というものの存在を予想させることになってくるわけです。

すると、そこでは倫理ではなく、法と国家というものが浮かび上がってきます。

さらに言語という問題があります。これは狭義のコミュニケーションです。そうすると、共同体（コムニオ）を考える場合には、言語とはそもそも何か、どういう場合に言語は正しく使われるのかという問題も出てくるわけです。

それは二十世紀の人文科学で、いろんな仕方でも問題になりました。言語哲学や、言語学、あるいは

記号論、そういう問題と関わってくるわけですが、特に言葉をいかに正しく使うかという問題があるわけです。

それから秩序ということも、国家というシステムの中に含まれてくるわけです。しかしその場合、それを頭に置いた上で、たとえば共生、一緒に生きる、とはどういうことか。

皆一緒に生きるのだから、「あいつは気に食わないから殺してやろう」と、それはいけない。人をやたらに傷つけたりしてはいけない。

それから労働も怠けてはいけない。やはり働ける人は働かなくてはならない。

交換という場合も、きちんと等価交換を行わなくてはならないので、盗んだり、奪ったりするのは間違いである。

言語についても、正しい使い方がるので、特に嘘をつく、そういうことをやってはいけない。無意味な言葉を使ったり、嘘をついたりしてはいけない。

それから秩序というものについても、皆で決めた秩序を破ってはいけないということになりますと、やはり法や倫理というもの、あるいは道徳というものの基本的なことが浮かび上がってくると思います。ここでひとつ忘れてはならないことは、イエスの時代には、「律法」がありました。そこには現代のような法と倫理の区別がなかったことです。いずれにせよ、人格、共同体、コミュニケーションということを考えていきますと、それらを成り立たせる共同体の姿と、共同体を維持する規範があらわれてくるわけです。それをイエスがどう見たかを考えていく。

どういふことかと言いますと、イエスが関わったのは現代の意味での倫理ではなくて、律法なのです。そして律法においても、以上のようなことが重要視されていたわけです。

しかし、以上ではあまりにも抽象的すぎますので、私たちは今言いましたような一般的なモデルだけではなくて、特にイエスは日常生活まで問題にしていますから、日常生活に近いようなモデルで考

えてみます。

◆プログラム

これも言葉の問題と関わるのですが、よく言語学で問題になったことで、言葉はどうして通じるのだろうと、そういう問題があります。もちろん言葉とは何だ、どうして通じるんだと言いつと、色々な面があるんですけども、ごく当たり前な場面として、たとえば喫茶店に行きます。

たとえば喫茶店に行つて、店員に案内されても、自分で行つてもいいのですが、席に着くと、店員がやって来て、「何になさいますか」と言う。その時「コーヒー」と言えばそれ以上説明しなくても、用は済んでしまうのです。

もちろんコーヒーにもいろいろありますから、アメリカカンだったり、ブレンドだったり、モカやリマンジャロだったりするかもしれませんが、そういう場合はそう言えはいいのであって、基本的には「コーヒー」と言えば済んでしまう。

そうすると店員は「かしこまりました」と言つて、こちらは何も言わなくてもお絞りや、水が出てきます。つぎに飲み物としてのコーヒーですね。それから砂糖やミルクも持つてくると思いますが、それを飲むわけです。飲むと黙つていても伝票を持つてきますから、それを持つてレジへ行つてお金を払つて店を出る。

問題は、どうしてここで「コーヒー」と言うだけで通つてしまうのか。これは言語学で問題になつておりまして、普通は状況というふうに言うんですね。

単語というものは、実は文の中で特定の意味を持つていて、しかし文というものは、状況の中で特定の意味を持つというのが常識なのです。だから喫茶店という状況では、言葉が特定の意味を持つ。それはそうなのですが、もうちょっと考えていいだろうと思ふんです。

スーパードットたら、店員に「コーヒー」と言えば、飲み物を持つてはこないですよ。「コーヒーが欲しいのですが」と言つたら、コーヒー豆、挽いたコーヒー、インスタントコーヒーなどを売つている棚に案内してくれる。「コーヒー」と言えばそこに連れて行つてくれる。つまりコーヒーという語が、喫茶店とスーパードットでは違った意味になるのです。

喫茶店だったら、わざわざ「コーヒーが欲しい、飲み物のコーヒーです。飲み物のコーヒーというのはコーヒー豆を挽いて、熱湯を注いで、出てきた汁をコップに入れるんです。そういう飲み物が欲しい。私はそれに対してお金を払いますから」と、わざわざ言わないですよ。言わなくてもちゃんと意味が通つちゃうんです。

スーパードットたら、コーヒーは飲み物ではありません。それはなぜだろうか。

これはコミュニケーションの問題になるわけです。いかにしてコミュニケーションが可能になるか、そういう問題と関わつてくるのです。それについては、またいろいろと問題があるのでしょけれど、我々の場合だったら、それは喫茶店にはコーヒーを飲ませるプログラムがあるからです。コーヒーだけではありませんが、飲料や軽食を提供するプログラムがあるからです。

誰か人が入つてきたら、それは何か飲みたいというしるしだから席に案内する。そこまでは自動的に進みますけれども、その先は進まないのです。どういふことかと言いますと、店にはお客さんが何が欲しいのか解らないから、「何になさいますか」と訊くのです。

お客さんの方は、コーヒーならば、「コーヒー」と言います。これは情報になるわけです。選択肢がいろいろあつて、紅茶かもしれない、ジュースかもしれないですね。選択肢が色々あつて、どれかを決めないと店員が困りますから、それを決めてやれば、またプログラムが自動的に進行していく。店員が奥に行つて注文を告げ、奥の方でコーヒーを入れて、店員がそれを持つてくる。客がそれを飲む。

もうひとつ自動的にいかなることがあるのです。今度は客の方が、このコーヒーはいくらかという情報を必要とするわけです。それが伝票です。それを持ってレジへ行行って払う。つまりプログラムがあつて、店と客がそのプログラムを共有している場合にコミュニケーションが成り立つのです。

状況だけではなくて、プログラムというふうには考えないと、情報の意味がはっきりしてこないのです。プログラムは自動的に進行するのだけれども、どこかで自動的にいかなくなる。選択肢があらわれてくる。そこで情報を入れてやれば、また自動的に動き出す。それがコミュニケーションが成り立つということですよ。

当然、喫茶店ならば喫茶店の、ひとつのプログラムがあるわけだし、それだけではなくて、学校には学校の、研究所には研究所の、会社には会社の、それぞれプログラムがあり、病院にも、お役所にもプログラムがありまして、そのプログラムを皆でshareする、共有しているから、そこでは簡単な言葉でも誤解されずに伝わる仕組みになっています。そう言うことができます。

なぜ今、イエスの話をするのに、こんな社会学みたいな、言語学みたいな話をするのかと言いますと、これが結局イエスの言っていることと関わってくるのです。どう関わってくるかと言いますと、大体こういうことなのです。

つまり我々の日常生活はプログラムのネットワークの中にあるわけです。個人のプログラムがあると思います。自分は、この世界でどのように暮らしていこうかという、それぞれの個人のプログラムがあるだろうと思います。

家族には家族のプログラムがあるでしょうけど、家族の場合には、家族でひとつの仕事をするというときは別ですけど、そうでない場合には、むしろ家族共同体を維持するという、こちらの方が大事ですから、家族としてある目的を設定して、それを実現するプログラムを組むということは、今日ではあまりやらないでしょうね。

これはいわゆる、ゲマインシャフトの特徴で、これは何のためにあるというわけではなくて、皆がそこで一緒に生きるということが大切な共同体です。家族、昔の村、ある意味で民族もそうですけれども、同じ土地に住んで、血縁関係があり、お互いによく顔を知っていて、親密感、信頼感を互いに持っている。そういう状況の中で共同生活が営まれているから、そこでは個人の権利、義務、契約を言い立てなくても、自然に皆で仲良く暮らしている、そういう共同体をゲマインシャフトと言っています。

それに対して会社のような契約社会をゲゼルシャフト（利益社会）と言っています。今言ったような、プログラムがはっきりしているのは利益社会の方でしょう。

しかしそういう社会の中で、プログラムがたくさんあつて、それぞれが目的を持って、それを遂行しているのですけれども、それを遂行する上において、それぞれのプログラムの中では特有の言葉が通用しているわけですが、プログラム同士が衝突したり、混乱したりすると困りますから、そういう衝突や混乱を避けるために、秩序を作つてそれを守る。これが広い意味で国家の役目だと思います。それに背いた人間には罰を加える。

国民生活の安全を守るということは、ひとつはそういうプログラム同士が衝突しないように、秩序を作つて安全を守る。そういうことがあるでしょう。

現代生活では一般的に言つて、そうなっているわけです。もつと詳しく話さなくてはいけないのかもしれないけれども、今の話はこれくらいにしておきます。

そこで何が問題かと言いますと、それぞれの人間が、それぞれの特定のプログラムの中にいて、そのプログラムの中で自分の将来をも設計して、それを実現していく。たとえば勤め先では、勤め先のプログラムに従つて働くとかたかたちになっているわけで、限定されたかたちになっているんです。

先程言いましたゲマインシャフト、つまりcommunioの原型的なかたちと比べますと、これは契

約による限定のない社会です。人間が働いて、作ったものをお互いに好意からして与え合う。

それは好意、愛からというように言えるでしょうけれども、そういうモデルと比べると、プログラムを持つ社会は極めて限定された形になっていまして、それを非常にはつきりした形で言い表したのが、たとえばニーチェだっただろうと思います。

つまり *perspectivism* です。遠近法とか観点主義とか訳します。もちろんニーチェはプログラムなんて言葉を使ったわけではありませんけれど、プログラムされた社会では、その成員は皆、プログラムの中で意味づけられている自分の立場から、自分自身とか、人間とか、社会とか、国家、自然を了解している。価値観もプログラムの中で決まるのです。

社会の中の中に住んでいる人間は皆、同じ考えを社会的通念として共有しているように見えるけれど、実はそれぞれがプログラムに規定された視点からものを観ているのであって、それぞれの社会が他の社会とは違う通念を持っている。こうして生活自体、使う言葉の意味自体、行動自体、生活範囲自体がプログラムからして限定されている。

その限定された視座からものを観ていって、しかもこれはニーチェの特有の言い方ですが、それらは「力への意志」に支配されている。

「力への意志」とは、簡単に言うと自己中心性みないなものです。個人であれ、会社のような利益社会であれ、国家であれ、それぞれが極めて自己中心的な視座を持っていて、世界は自己中心的な視座から観られ、価値づけられ、位置づけられている。自分自身も、他者も、社会も、自然も、歴史もそう。

つまりそれぞれが、自分にもっと都合の良い解釈を選ぶ。自分のそういう視座を成り立たせるような、あるいは自分達が中心になるような、つまり自分に都合がいい自分理解、他者理解、世界理解、自然理解を持つようになる。これを *perspectivism* (観点主義) と言います。

それはどうということかという、世の中は、どう見えるかということしかないもので、真理そのものなんてないというんです。あるものは、どう見えているかということだけのことで。しかもそれが極めて自己中心的な視座から見られている。

そこからニーチェのニヒリズムが出てくるわけです。真理は存在しないという。

それは一応置きまして、今言ったような、観点主義、視点主義というものは、ある意味で現代の常識になっています。「正しいこと」はあるが、どれにしても、それは唯一正しいわけではない。それはその人が持っている特有の視点によって規定されているのだ、という。

実はこれはコミュニケーションが成り立たなくなる世界です。全体に共通するプログラムがないわけですから。どこでも独立したプログラムがあつて、それらがお互いにせめぎ合っている。それがいくつかわでも連帯して、そこに共通したプログラムができれば、その中ではコミュニケーションが可能になるわけですが、その外部とはコミュニケーションが断絶するわけです。

そういうことはどこから来ているかというと、それは結局プログラムの中で特定の地位を占めて、そこで働いて特有の言葉を使っている人間のあり方が限定されているからです。これはさつき申しました、共同体というものの原型ですね。それと比べて著しく限定されている。ここから出てくることは、プログラムに決定された考え方、価値観、生き方から解放されなくては、エゴイズムはなくなるらないし、コミュニケーションも不全となる、ということなんです。これが今回の私の話の結論ですが、まだその前に申すことがあります。

まず、さまざまなプログラムをつつむような共同体について言えることがあります。それは倫理なのです。私は倫理とは、人類の一員としての人間の義務だと思っています。働いて、価値のあるものを作って、それを等価で交換して、シェアする、それをコミュニケーションの中で、合意され、秩序づけられた仕方で行う。こうして皆でゆたかになる。そうやって共同体として生きているのだから、

共同体のメンバーが気に入らないからといって殺したりしてはいけない。

働けない人は別として、基本的に皆働いているわけだから、働ける人間が怠けているのはよろしくない。みんなで労働し等価で交換しているのだから、盗んだり、奪ったりするのはよくない。そういう労働は、言葉のコミュニケーションの中で行われるのだから、嘘をついてはいけない。通用しない言葉や、いい加減な言葉を使つてはいけない。それから、混乱や衝突がないように秩序があるのだから、それをやたらに破つてはいけない。

これらは基本的に出てくる共同生活の心得でありまして、さらに言えば「人格」というものは「身体」だと言いましたが、人間とは身体としての人格、人格としての身体だと私は思っています。人間は身体としての人格だから、生があり家族があり、労働と交換（売買）があり、言葉によるコミュニケーションと合意された秩序がある。すると殺すなかれ、姦淫すなかれ、盗むなかれ、虚言することなかれという掟が成り立ってくるわけです。

こう考えて、イエスの時代に還って、イエスが当面していた倫理——当時は倫理とは言いません、律法です——それを見るとどういうことになっているか。

今までみたいな話をくどくどと言わずに、いきなり律法から始めてもよかったですけれども、今みたいな背景を考えていた方が具体的になるのではないかと思うので、敢えてお話した次第です。

◆イエスと律法

イエスの時代のユダヤ教の律法ですが、このもとを尋ねますと、いわゆる「モーセの十戒」に辿りつきます。聖書（旧約聖書）に書かれているままが史実だとは思えませんが、紀元前十三世紀にモーセという偉大な指導者が現れたというのです。

当時ユダヤ民族の先祖はエジプトで奴隷状態に置かれていた。これは本当らしいですね。そこから

先どこまで歴史的な事実なのかは、はっきりしないけれど、とにかくモーセが、奴隷状態に置かれていたユダヤ民族をファラオの支配から解放するわけです。ファラオとはエジプトの王のことです。

モーセは彼等を引き連れて、紅海を渡ってシナイ半島に入りまして、そこで神様と契約を結んだ。神様と契約を結ぶのですが、そのときから神はイスラエルの民の神、民はその神の民となります。この場合の契約とは、秩序ある共生、共存の合意ということ。特別の内容のある売買契約みたいなものではなくて、その基になる、秩序ある平和な共存を合意することなのです。

とにかく神と民の間に契約が結ばれた以上、民としての義務が発生するので、それが律法なのです。神様がモーセに律法（いわゆるモーセの十戒）を与えたということになっています。しかし律法の中身を見てみればすぐ解りますが、それが前提するのは解放されたばかりの民のシナイ半島の状況では全然ありません。むしろかなり長い都市生活の経験を経た後にできたものだということが明らかだと思えます。

とにかくそこで言われている日常生活に関する掟は、「父母を敬え」、「殺すなかれ」、「姦淫するなかれ」、「盗むなかれ」、それから「偽りの証を立てるなかれ」、これは嘘をついてはいけないということにもなります。「偽証」は法的用語ですね。ユダヤ人はローマ人みたいに法的な思考に長けているのです。最後に「他人のものを欲しがつてはいけない」という戒があります。

つまり律法には都市生活上の秩序が前提されているんですね。所有権があり、家族制度があり、裁判がある。そういう社会が前提されている。

多くの学者は、律法はモーセの時代に溯ることは可能ではあるけれど、十戒全体が紀元前十三世紀にできたと思える人はあまりいません。むしろ前六世紀、七世紀頃であろうと思える人が多いです。

「父母を敬え」、「殺すなかれ」、「姦淫するなかれ」、これは個々人の生と家族の問題です。それから

「偽りの誓いを立てるな」、これは言語使用の問題、それから「盗むな」、「人のものを欲することなかれ」、これは所有権の事柄です。

そういう律法が、イスラエルの生活の中で解釈され発展していくこととなります。これは神様が与えた律法なのだから守らなくてはいいかん。これを守るのがイスラエルの義務である。ただし、今列挙したのは人間の生活に関する条項で、神様に関する条項は抜いてあります。神様に関する条項としては、イスラエルの神以外の神を拝んではいけない、偶像を作ってはいけない、神の御名をみだりに唱えてはいけない、土曜日には神様が創造の業を終えて休んだ日だから、仕事をしてはいけない。これは聖なる日である。そういう掟があるのです。これらは特に宗教的なものだから、今はちょっと置いておきます。

それらを含めてイスラエルの中では、律法を守ることが義務であると考えられている。しかし、今言ったようなことだけでは、あまりにも漠然としていますから、やはりそれに基づいて、非常に細かい条項が出来上がってくるわけです。それは基本的な律法をマニュアル化して実生活に適用することです。

中近東の人たちは、そういうやり方が好きなようです。預言者が語ったことを基礎にして、その解釈をして現代生活に適用する。

イエスの時代では、それが非常に発達しておりまして、従ってそういう法解釈の網目ができていた。たとえば安息日の掟というものがありますが、それは原因譚的に言われているのです。世界の創め、神様が六日かかって世界と人間を創造して、七日目に休まれたから、その日を聖なる日として守り、その日は仕事をしてはいけない。そういう掟であります。

それはいまの土曜日に当たります。ですから日曜日というのは、元来週の第一日目だったんです。土曜日が最後の日だったのです。

実はキリスト教になりまして、これには金曜日にイエスが十字架につけられ、日曜日に復活したということが関係しているのだと思いますが、キリスト教では、日曜日が聖日になりました。それが一般化して西暦が世界中で使われるようになりますと、聖日（休日）が週末だという感覚から、月火水木金土日という順序ができてきます。

いまのカレンダーを見ますと、月火水木金土日という順序で配列されているものがあるので、日月火水木金土という順序のカレンダーと、月火水木金土日という順序のカレンダーと、両方あります。

元来は日月火水木金土でした。だけど最初に休みがあるのは変だから、日曜日が最後に来るものがあるのです。

これは余談ですが、ユダヤ教では安息日に働いてはいけないということになった。ところで働いてはいけないとはどういうことでしょうか。そもそも働くとはどういうことか。

これにはずいぶん議論があったわけです。物を運ぶこと、これが労働です。あるいはくつついている物を離したり、離れている物をくつついたりする、これも労働なのです。こういう基本的な考え方があったようです。

物を運ぶのが労働だということになりますと、パンを食べるときはどうするか。パンを口に運ぶ、これは労働です。水も飲めない。そうすると、例外規定ができる。「食事は労働は労働だけれども、いい」ということになる。

歩くのはいかがか。自分の体を運ぶことだから、労働じゃないか。そうすると、動いちゃいけないというわけにもいかなから、二百歩までなら大丈夫。こうして百何十かの規定ができた。

安息日に家畜が穴に落ちたらどうなるか。運び上げると労働になるわけですが、放っておいたら家畜が死んじゃう。そこでやっぱり例外規定があったようです。こういう具合で細かい規定ができ、それをいちいち覚えて、日常生活に適用することを一生懸命やっていた人がいまして、これはパリサイ

人と言われています。律法学者が多かった。

イエスの言葉を見ますと、彼等に対する批判が非常にはっきり出ています。だからイエスの言葉について考える場合は、いろんな観点がありますが、ひとつは律法主義批判ですね。ユダヤ教の律法主義への批判ということがあって、イエスは律法主義を批判した。律法主義とは、マニュアル化した律法の細目を完全に守ることそれ自体が大切で、それが神に義人と認められる条件だ、という考え方のことです。イエスはそれらに対して批判的であった。そこからイエスを見ることもできる。

イエスは律法自体は非常に尊いものと考えている。律法は正しいけれども、律法主義は批判した。これは一般化している考え方であります。このようなイエス把握はもちろん決して間違いないじゃないのです。

しかし、ただ律法主義を非難したというのではなくて、先に述べましたようなかたちで考えてみますと、ユダヤ教の律法の場合にも、律法というものができる根幹には、社会生活がある。それはやはり身体としての人格が生き、家族生活を営み、さらに労働と交換による社会生活を営み、すべてがコミュニケーションの中で行われている状況です。こう考えると個人生活、家庭生活、公正な社会生活と言語の使用を確保しようという律法の意味が見えてくるわけです。その社会生活の中で、そういう観点から、イエスの言葉を見るとどうなるか。それがつぎの話です。

今までのところで、「どうしても、ここがハッキリしないからもう少しハッキリさせろ」というところは、おありですか。

司会 もし何かございましたらどうぞ。よろしゅうございますか。それではイエスのお言葉の方へお進みください。

八木 つぎはイエスの言葉です。まず人生とプログラムということをお話しましたが、誰もが人生のプログラムを個人として持っています。それを現実していこうとする。それが人生なのです。

プログラム実現のための配慮があります。「思い煩い」というふうにも言われます。マルティン・ハイデガーが、『存在と時間』の中で、人間の本質を配慮として規定しました。人間はそれぞれが特定の資質と背景をもった個人として、いわばこの世界の中に投げ出されているわけですけれども、これは決定論ではないから、やはりそれぞれが将来において自分の在り得る姿を思い描いて、それを実現しようとする。その営みを「配慮」と名付けている。それが人間的存在だと言ったのですが、ここにハイデガーとイエスの違いがあるのです。ハイデガーは「プログラム」という語を使ってはいません。しかし「プログラム」という概念を使うと、人間の日々の営みの実現がよりはっきりしてきます。イエスはプログラム・フリーとでもいいですかね、プログラムから自由な生き方を説くのです。それが「思い煩いな」という言葉です。

まず「人生とプログラム」と、レジメには書いてありますが、マタイ福音書の六章の二五節以下を取り上げます。ルカ福音書の第十二章二二節―二三節では多少言葉は違いますが、ほとんど同じです。ただ、ルカの方は、悟れ、解れという意味がはっきり出ています。

マタイを読んでもみます。

「それだから、あなた方に言うが、何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思い煩い、何を着ようかと自分の体のことで思い煩うな。命は食物にまされ、体は着物にまされではないか。空の鳥を見るがよい。蒔くことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのにあなた方の天の父は、彼らを養ってください。」

ちょっと聞くとなんか話です。しかしここにイエスの人生把握があらわれる。

「あなた方は、彼らより遙かに優れた者ではないか。あなた方のうち誰が思い煩ったとて、自分の

寿命をわずかでも延ばすことができようか。また、なぜ、着物のことで思い煩うのか。野の花がどうして育っているか、考えてみるがよい」。この「考えてみるがよい」というのは、ギリシャ語では「解れ」、「悟れ」と言っているんです。「働きもせず、紡ぎもしない、しかし、あなた方に言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。……まず神の国と神の義を求めなさい。これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」。

これはプログラムの否定です。個人で持っている生活のプログラムと、それを実現しているという配慮を否定している。「そんなものは要らん。必要なものは神様がくださる」と。そういう、つまらないことを思い煩うものではないと。

もちろんそれだけではなく、ポジティブな面として、神の支配の実現、神の意志の遂行を求めなさいということがある。神の国と神の支配を求めなさいということが、中心になって、プログラムが否定されてくる。以下で家族や労働などについてのイエスの言葉を見ましましょう。これらはもちろん先に申した律法とふれてくるわけです。

家族についても、特に家族論というものはありませんけれども、ある意味で、それが覗いているところはあります。ルカの第十四章の二五節以下です。

「大勢の群衆がついてきたので、イエスは彼らの方に向けて言われた。誰でも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、私のもとに来るのでもなければ、私の弟子になることはできない」。このあとに続く言葉は、かなり後の状況を反映しています。迫害に際して作られた言葉、変えられた言葉のようですから、それは読まずにおきます。

家族関係は、否定とは言わないけど、相対化されている。つまり「私のもとに来い」というのは、イエスが語り伝える真理を大事にしなさいということです。これが一番大事であって、家族関係というのは相対化されてしまう。それは一番肝心な問題ではない。

それから性的問題があります。それについてのイエスの言葉がありますが、実はこの解釈についてはいろいろ問題がありまして、この言葉もイエスが言ったのかどうか。むしろ後代の禁欲的な生活が成り立ってきた状況で作られたのではないかという説もあります。ともかく、こういう言葉があります。

「母の胎内から独身者に生まれついているものがある」。これは生まれつき性交不能ということですが、「また他から独身者にされたものもある」。これは、去勢された人たちのことです。「また天国のために、自ら進んで独身者になったものもある」。これは、天国のために家族生活を断念した人という意味に取れます。結婚生活を断念している。「この言葉を受けられるものは、受け入れるがよい」(マタイ十九・一二)。

労働と報酬。報酬とは要するに、労働と物やサービスの交換ですね。もちろんイエスの時代でも貨幣はありました。マタイの第二十章一節―一五節です。読んでみます。

「天国は、ある家の主人が、自分のぶどう園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである」。この時はもう、日雇い労働者が結構いたのですね。毎朝市場で待っていて、雇い主がそこに来て、連れていって働かせるわけです。夜明けどき、「彼は労働者たちと一日、一デナリの約束をして、彼らをおぶどう園に送った」。夜が明けたときは、六時ごろだと考えられます。「それから、九時ごろに出て行って、他の人が市場で何もせずに立っているのを見た。主人はその人たちに言った。「あなたたちもぶどう園に行きなさい。相当な賃金を払うから」。そこで、彼らは出かけていった」。

「主人は十二時ごろと三時ごろに出て行って、同じようにした。五時ごろにまた行ってみると、他の人々が立っていた」。一日中立ちこんぼうで、誰も雇ってくれない。六時になりますと、もう日が暮れますから働けない。

主人は彼らに「なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか」と尋ねると、彼らは「だれも雇ってくれませんか」と答えたので、主人は言った。「あなた方もぶどう園に行きなさい」。さて夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った、「労働者たちを呼びなさい。そして、最後に来た人々からはじめて順々に最初に来た人にまで賃金を払ってやりなさい」。そこで、五時ごろに雇われた人々が来て、それぞれ一デナリずつもらった。「一時間しか働いていないのにですね」。

「ところが、最初の人々が来て、もっと多くもらえるだろうと思っていたのに、彼らも一デナリずつもらっただけであった。もらったとき、家の主人に向かって不平をもらして言った。「この最後の者たちは一時間しか働かなかったのに、あなたは一日中、労苦と暑さを辛抱した私たちと同じ扱いをなさいました」。そこで彼はその一人に答えて言った、「友よ、私はあなたに対して不正をしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではないか。自分の賃金をもらって行きなさい。私は、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。自分の物を自分がしたいようにするのは、当たり前ではないか。それとも私が気前よくしているので、ねたましく思うのか」。

要するに、労働時間と賃金とが釣り合っていないのです。労働価値説は近代経済学の常識で、マルクスの理論のひとつの柱にもなっているのですが、商品の価値を決定するのは、それを作るために支出された（平均的）労働の量だということなのです。

だから支出された労働の量が多ければ、その商品の価値、したがって価格が高いのだ。そういうことです。ですから、労働時間、あるいは労働の量が大きければ報酬が高いのは当然だというのは常識ですが、それは等価交換の原則です。

しかしイエスの譬え話の場合は、そうじゃないのです。丸一日というのは十二時間ですね。昼休みはあつたかもしれない。一日働いても、一時間働いても同じ一デナリの賃金をもらったというわけです。

これはもちろん比喩ですから、これをいきなりイエスの労働倫理と捉えるのは間違っていると思います。これは比喩であつて、神の国に受け入れられるための業績と報酬という問題と関わっていると思います。それにしても、こういう比喩を使つたというのは、非常に注目に値すると思います。當時でもこれは非常識ですね。

労働の量と、報酬とが釣り合っていないのは、逆に言うとも報復についても同様なのです。だからそこでイエスの考え方が学べるのではないかと思います。有名な箇所（マタイ五・三八）なので、皆さんご承知だと思います。

「目には目を、歯には歯を」というのは報復、あるいは賠償なのです。一般原則は等価法則ですけれども、イエスは悪人に手向かつちゃいけないと言ふ。これを文字通りとると大変なことになります。悪人がやりたい放題のことをやっているのに抵抗せずに放っておけと言ふのですから。

「だれかがあなたの右の頬を打つたら、ほかの頬をも向けてやれ」。これも有名な言葉ですけれど、解釈についてはいろいろな説がありまして、だれかがあなたの右の頬を打つなんておかしい。だれかが僕の右の頬をひっぱたこうとするなら、左手を使わなくてはいけません。

左手で打つのは普通あまりないから、この人は左利きだった、という説があります。そういうことを問題にした人もいますが、それはどうでもいいのです。要するに片方を打たれたら他方も打たせてやれ、ということ、つまり報復するということです。これでは法体系も壊れることになります。

これにはいろいろな解釈があると思うのですが、私はこう思います。相手が自分にやつたことに対して、自分がどのように振舞うかということは、等価の報復という原則で決めてはいけません。つまり、相手のしたことに、私がどう対処するかといえば、そこには私の自由があるわけだから、相手の行為が私のそれに対する反応を決定することはないはずだ。私の反応は私の自由の事柄で、相手の出方によって決定されるものではない。実際、イエスは無限の赦しを説きます（マタイ十八・二一

一二五)。これも相手の態度に決定されることのない自由の事柄です。そういう意味に取れます。自由ということが重要視されている。

これがイエスの神の国、神の義ということと関わってくるのですけれど、いずれにしても報復ということが、覆えられているのは事実です。仮にこれを一般原則にすると、刑法は成り立たなくなってくる。同じように、善悪と義・不義の無差別ということがあります。マタイの第五章四五節です。四三節から読んでみます。

「隣人を愛し、敵を憎め」と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし私はあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。これは有名な部分です。四五節にはこうあります。「それは、こうして天にいますあなたがたの父の子となるためである。天の父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、義人にも義ならざる人にも雨を降らせる」。神はあらゆる人間を無条件に受容している、ということですよ。ただし、イエスの終末論（最後の審判）には、マタイ十三章が示すように、悪人への審きがありますから、ここには二重構造があると考えられます。それは理解不可能なことではありません。人間の場合でも親は子を無条件に子として受容しながら、子が悪いことをすると叱責して、善い方へと向かわせるものです。

いずれにせよ、イエスには交換や報復や賞罰について等価性の原則を破ってしまうところがあるのです。

同様に罪と罰というものがあって、マタイの第七章一節ですね。罪とそれに対応する罰との間に裁きがあります。ところでイエスは「人を裁くな、自分が裁かれないためだ」と言う。「裁かれないためだ」がイエスの言葉かどうかはわからないのですけれども、「人を裁くな」という言葉があります。

「なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか」。他人を「裁くな」と

言うのですね。ここでは個人と個人の話になっていますが、「裁き」がないと共同体では民法も無意味になっちゃいます。こういうように、労働と報酬の等価関係、罪と罰の応報関係が破れている、善悪と義不義が無差別に扱われる。こういうところで共同体の基本的な秩序、等価交換、あるいは応報ということが、消えています。

言語についても、我々は基本的に共同体で通用する言葉を使わなくてはいけない。コミュニケーションを破壊しないためには、嘘をついちゃいけないというのは当たり前ですが、言葉を使う基本の心得として、解る言葉を使わなくてはいけない。解らない言葉を使つてはいけないので、これは言語倫理の基本だろうと、私は思っています。

カタカナ文字を使った人がいます。日本語でも言える言葉をわざわざカタカナで言つて喜んでる人がいます。ああいう人は言葉の悪い使い方をしている。自分の知識をひけらかすために言葉を使っている。私はあまり好きではありません。これは別の話ですが。

イエスは譬え話を語っている。群集、集まっている人々に話をする。話をする以上、誰でも何とか解つてもらえるように話そうという努力をします。それがうまくいっているかどうかは別問題ですが。

しかしイエスの場合はそうではないんです。「イエスが一人になられたとき、側にいた者達が十二弟子と共にこれらの譬えについて尋ねた。そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、外の人々には、すべてが譬えで語られる。それは彼らには見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、悟らず、悔い改め赦されることのないようになるためである」(マルコ四・一〇—一二)。

わざわざ、解らないように話しているというのです。もつともこれはイエス自身がそう言ったのか、聞いた人たちがイエスの意図をそう解釈したのか、わかりません。イエスは「神の支配」という、客観的に見ることでできない事柄について語っているのです。これは各人が自分の中に(ルカ十

七・二〇―二二参照) 見出すことで知るしかないものです。イエスはそれを解らせようとして譬えを使って語るので。しかしそれは通じない。等価交換や応報や善悪の差別を否定するような言葉がわからないのと同じことです。イエスが日常言語の世界にはいないことを告げているので、結果として、イエスは日常生活では通じない言葉を語っていることになる。

ついでに秩序についても、これはいろんなふうを理解されますけど、こういう言葉があります。イエスは弟子を呼び寄せて、「あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う人は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべて人の僕とならねばならない」(マルコ十・四二―四四、九・三三―三五参照)。

これもその意味についてもずいぶん議論がありまして、反体制が流行っていたころは、イエスは反体制のリーダーだといわれて、この言葉がよく引き合いに出されました。

イエスは反体制主義の典型だという理解がよくなされるのです。しかしこれは反体制なのか。むしろ体制自体が問題になっているのではないかと読むこともできます。「支配者になろうとしたら、仕える人となれ。リーダーとなりたかったら、あらゆる人の僕となれ」ということを文字通りにとつたら、リーダーがいなくなってしまう。

リーダー、エリートは必要なのですが、リーダーが良いか悪いか、実際に適しているかどうかは全く別です。リーダーになっている人が、それに相應しいか、相應しくないかというのは、リーダーの存在、必要とは全く別ですけれども、やはりリーダーがいなくてはならないというのは事実なのです。そうじゃないと組織は運営できないのです。しかしイエスは、えらくなりたかったら命令者になるな、と言うのです。これは組織を作るな、と言うに等しい。実際、イエスは組織を作らなかつたのです。

さらに共同体、家族の共同体も含めて、イエスが弟子を召されたという話があつて、それもこの通り史実なのか、後で作られていったのかは、かなり問題になっていますが、とにかくこう書いてある。

「イエスが少し進んで行かれると、ゼベダイの子ヤコブと兄弟ヨハネとが船の中で網を繕っているのをご覧になった。そこですぐ彼らをお招きになると、父ゼベダイと雇い人たちと一緒に船に置いて、イエスの後についていった」(マルコ一・一九―二〇)。

仕事をしているときに「おまえはおれの弟子になれ」と言ったら、仕事を捨ててついてきちゃつた。これには同じような話がありまして(十・一七―二二)、ある人がイエスをみて走り寄り、永遠の生命を受けるためにはどうしたらよいか、尋ねます。イエスが「律法の基本を守れ」と、当時としては至極当たり前な答えをしますと、その人は「私は子供のときからすべて守りました」と言う。イエスは嬉しかったらしい。しかしこう言うのです。「もしそうならば、おまえは持っているものを全部売り払って、貧しい人に施して、そして私についていらっしゃい」。そうしたら、その人はそれができなくてすぐごちと帰っていったという話です。これはある意味で共同体の破壊です。時間がありませんので、「イエスと律法」については今日はこちらまでしかお話できないと思います。

◆むすび

人間の在り方の基本的な私たちを描き出しますと、「身体としての人格」から成る共同体がありまして、互いに自分が労働して作ったものを交換する。この場合、等価交換が基本である。さらにそういう営みを、各人または社会のプログラムに従って、コミュニケーションを営みながら、遂行する。いろいろなプログラムがあるから、それらが衝突しないように秩序を作つてそれを守る。そういう

秩序に従って共同体を形成していくときに、どうしても言葉を使うことが必要になってきて、だから言葉というものは正確に通じるように、また信頼に価するように、正しく使わなければならないのです。

そこから始まって、所有権、契約、義務、権利、違反に対する罰だとか、そういう法の体系ができてくる。また、他方ではそういう社会を守るために倫理があり、倫理は法と違って心の内面の事柄（動機の純粹さや良心性）に及ぶし、規範を守るために必要な徳（人格への畏敬や善への意志など）が説かれるようになる。要するに「身体としての人格」の共同体を守るための規範が倫理である。少なくとも倫理は、そういうものを反映していると言える。

ところが、イエスの言葉はみんなそれを壊すのです。イエスは高いキリスト教倫理の模範、体現者だという、なんとなくそういう見方があります。生き方のモデルです。そういう意味で、あるべき私たちの体現者です。キリスト者とはイエスをモデルとしてイエスの歩んだ道を行く者だと、よくこう考えられるのですが、たしかにそうに違いはないけれども、イエスの言行が倫理を超えているところを正しく見ないと、イエスを誤解することにもなり、また共同体の秩序を破壊することにもなりかねない。

ではイエスは何を言っているのだろう。本当はそこが一番中心なのです。だけど後十分しかありませんね。

先程お話ししたことを思い出していただきますと、それぞれの方がそれぞれの個人的プログラムの中で生きていく。ということは、限定された状況の中では、限定された言葉を使っている。言葉の持つ意味も限定されているわけです。

言葉の意味を限定したら、自分の在り方も限定されるのです。そういうふうな限定が加えられていて、限定を外すのは危険だと思っ込んでいます。そういう状況があるわけです。

しかしこれはあまりにも狭いから——誰でも人間は狭い世界から、外へ出なくてはいけないので——そういう狭い、ものの見方、在り方をなるべく広くしていかなくてはいけない。それは常識としてあると思うので、それを基準的な言葉で公共化してゆくと、個人を超えた共同体の、基本的なコミュニケーションのカタチが出てくる。

そうしたカタチを形成し維持するための合意された決まりが律法また倫理である。

しかしイエスの目から見ると、こういう人間の在り方はまだ限定されているのです。

どういふふうに限定されているかという点、こういう人間の営みの主体が、普通の自我である。自我はいろいろなことを学習して、社会生活に適應していく。いろいろな選択肢が出た場合には、それを選択するのが自我で、自我には社会性もあります。さまざまなプログラムの重要の中で、自分のプログラムを中心にして、それらにいわば折り合いをつけているのが自我です。

ところがイエスはそうじゃない。そこにまだ限定がある。人間の生き方は自我よりもっと深いところから出てくる。それでイエスは神の国、神の支配、神の義を語ったのです。ただしイエスは一流の言い方でそれを語る。原始キリスト教時代になると、もうちょっと話が解りやすくなる。自我と妥協したのかもしれない。

どういふふうの話が解りやすくなるかというと、今言ったような基準的な倫理ですね。倫理が義務である。このレベルでは人間は義務として、倫理を行っている。しかし実際は、これは愛の表現でないのだめだ。倫理は愛がとるかたちである。愛からして自然に前述の基準的なカタチができてくるもので、愛は人間を超えたところから出てくる。「(人の)愛は神から出る」と言われます(Ⅰヨハネ四・七参照)。パウロは「愛は律法の完成である」と言います(ローマ十三・一〇)。人を愛する者は律法を全うする、ということですね。

神から出た愛が、自然に倫理を守っていくのだというのが、原始キリスト教の基準的な考え方で

す。ですから、これは極めて解りやすい。これは道徳と宗教の基本的な関係で、極めて解りやすい。ところでそれをイエスに持ち込んでいいかという、基本的にはいいのですが、まだちょっと問題があるように思うのです。

イエスをもっとラディカルだったのではないのでしょうか。イエスは律法主義を壊した後で、宗教からどういう行爲のカタチが出てくるか、そこまで言っていないのです。若すぎたのかもしれない。イエスは十字架につけられたとき、三十代だっただろうと思うのです。

あんまりラディカルなことを言うから、イエスはユダヤ教の支配者層から嫌われ、民衆からもてはやされたから、ローマからは反ローマ叛乱の首謀者になるのではないかと恐れられて十字架にかけられた。

お釈迦様は四十年以上、弟子を訓練したのだけど、イエスの公生涯は足掛け三年あるかないかです。

本当に残念と言ったら変ですけど、イエスがもつと長い間活動を続けていたら、余程イエスの思想自体も解りやすくなって、正しく伝えられたのじゃないかと思いますが、残念ながら今言ったような断片的な言葉しか伝えられていません。

とにかくそこから見えることは、あらゆる制約、つまりプログラムによる制約ですね、価値観とか義務とか目標とかいう制約ですね、さらにプログラムの重奏をつむ秩序——法や倫理——の原則（等価交換）があります。そこから外に出なくてはだめだ。あるいはそういう制約が全部落ちなくてはだめだ。落ちるといえるのは、そこから自由にならないといけないということです。

ではどういいう世界に出るかという、「どういいう世界」じゃないのです。「どういいう」ことがなくなつた世界で、「何」、「なぜ」、「何のため」ということがない世界。ただし「無い」というのは虚無ではありません。そういうものを越えた世界です。いわば「プログラム・フリー」な世界、プロ

グラムを超えた世界なので、実はその世界で働いているものを見分けていくと、イエスが言うような、神の支配、またそれに生かされた他者というものが出てくると考えることができます。ただし、そこからどういいうかたちが出てくるかということは、イエスは残念ながら明らかにしないうちに世を去ってしまつた。結局イエスは何を語ったのか。

私たちの生活はいろいろな限定の中にあるので、その限定を守ることが正しいと思われる場合が多いけど、それでは人間は日常生活の担い手（主体）である単なる自我となりおわっている。それではいけない。実はそういう限定は、全部超えることができるのだ。そのときに初めて人間は——自我を超えた自己の深みで、とても申しましようか——自分を越えたものに触れる。そこから人間は新しく成り立っていくのです。それをパウロは「愛」と言つたのです。ではイエスは何と言つたか。この部分は福音書の中にはっきり出ていませんので、私が勝手に作るわけにはいきません。イエスはそれを明確に概念化してはいないのです。「神の支配」という言葉で暗示しているだけです。それを明確化するのには現代に生きる宗教者の責務でしょう。現代ではプログラムは個人、社会、国というレベルで、また今日、今年、来年……というレベルで、複雑になり強化されるばかりです。私は人間（自我としての人間）は通念の奴隷になっていると思ひますが、通念とは共有されたプログラムのことでしょう。イエスはプログラムを破壊せよ、と言っているのではないと思ひます。しかし我々が思考、行動、価値観や選択の上でプログラムに制約されていることが、はつきり自覚されてこなくてはならない。そうでなくては人間の自由——これは人間を超えたところから成り立ち、また他者への自由な奉仕に形を変えます——は成り立たない。イエスはそう言っているように思ひます。プログラムは人間の思考、行動、価値観を制約しますが、「観点主義」は同時にはなはだ自己中心的なので、エゴイズムもプログラムからの解放なしにはほんとうには克服されないと云えましよう。この点については今日は詳しくお話できませんでした。

(編集者注 本稿は、平成十七年二月二十六日に開催されたモラロジー研究所道德科学研究センター「公開講演会」の内容を収録したものである。)